グループホームでの一場面を通して

松　川　紗　都

Learning my lesson at a grouphome for the elderly

Sato Matsukawa

「あの人は本当は話せる」。衝撃の一場面でした。

現在私は認知症高齢者の方を対象とした、心理学的研究法を用いた非薬物的アプローチをテーマとした研究室に所属しており、そこでは、定期的にグループホーム（認知症対応型高齢者共同住宅）にて、認知・神経心理学的な手法を基盤とした認知トレーニングを含むデイ活動を行っています。大学を卒業する年、歯科衛生士としてどの進路に進むか悩んでいた私は、高齢者のQOL向上に携わりたいと漠然と考え、今に至るのですが、歯科とは縁も所縁もない現在の研究室に所属した背景には、歯科という枠組みからではないサポートについて学んでみたいと思ったからです。

さて、話は冒頭の一言に戻ります。とあるグループホームで、活動に参加してくださる男性のＡさんは、積極的にお話しをされる方ではなく、むしろしゃべらないと言っても良い方でした。活動はグループで行うのですが、もともと男性の方は女性を含むグループでは、お話をされない方が多いですし、認知症重症度も中等度レベルだったので、コミュニケーション能力も低下傾向にある方だと思っていました。しかし、ある日の活動の最中に、Ａさんに「どんなお仕事をされていたのですか？」と質問をしたところ、おもむろに手を口元に運び、上顎の義歯を外したと思ったら、ゆっくりと話し始めたのです。Ａさんは、義歯が合っていなかったがために、話せなかったのだと、その時初めて気がつきました。義歯を外した状態ではうまく話すことが出来ず、私にはＡさんのお話の内容の半分程しか理解できなかったことが残念でしたが、なかなか話を理解できない私との会話はＡさんにとってはそれ以上に寂しく、辛かったことと思います。この一件は、私にとって介護現場における歯科医療・保健について多くのことを考えさせられることとなりました。今回の出来事がなければ、私はＡさんが話さないのは、認知症が原因であると思いこんだままだったと思います。もしかしたら、私に限らず、このようなことは少なくないのかもしれません。

介護に限らず、どのような現場においても問題を抱える人が今も生活しており、誰にも気づかれないまま過ごしている事実が存在しているということを強く感じた忘れられない経験となりました。

【著者連絡先】
〒305-8572　茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻
松川紗都
FAX：029-853-6504
E-mail：s_matsu_kawa@yahoo.co.jp